渋沢栄一物語 Shibusawa Eiichi History

【第3回】

青春の旅路

栄一は、七、八歳のころから隣村下手計村に住む従兄の尾高新五郎（惇忠）の元へ通い、『論語』などの中国の古典を勉強します。

新五郎は、栄一より十歳年上で、人格・識見ともに優れ、生涯にわたり栄一に多大な影響を及ぼしました。

その教え方は独特で、一字一句を暗記させるようなことはせず、多くの書物を通読させることで、読む力や考える力が自然に育つのを待つものでした。

十一、二歳になると、突然のように書物を読むことが面白くなってきたようで、栄一は、『里見八犬伝』を三回も四回も繰り返し読んだり、寝食を忘れるほど『三国志』を読みふけりました。

安政五年（一八五八）旧暦十月、十九歳の栄一は、新五郎とともに、信州への旅に出ます。ともに家業の藍玉販売のため、信州一円の紺屋を巡るものでした。

当時二人は漢詩作りに熱中していて、旅立ちに当たり、「漢詩作りにばかり熱中しているんじゃないぞ。きちんと商売しろよ」と、両方の父親から同じような注意を受けます。

▲「内山峡」の詩拓影（実寸：縦130㎝×横225㎝・出典：渋沢栄一碑文集）
※この詩碑は、長野県佐久市内山峡の国道254号線沿いの岩壁にはめ込まれています。実物の拓本が渋沢栄一記念館にあります。

この折の二人の詩作品を集めたのが『巡信紀詩』と題された一冊の小詩集です。

内山峠を越えて佐久に入ると、栄一たち一行が必ず立ち寄ったのが下県村の名主木内芳軒の所でした。栄一はこの芳軒から『論語』を、芳軒は栄一から剣を学び合う仲でした。

詩集中の圧巻が、栄一の「内山峡」の詩で、後年の道徳経済合一説を彷彿とさせるものがすでにあり、注目されます。

この「内山峡」の詩は、昭和十五年（一九四〇）十一月、芳軒の外孫で温雅典麗な書風で知られる木内敬篤の書により内山村肱水の岩壁に刻まれて、一大詩碑として今に残されています。

（文：新井慎一）

物語の手引き

『内山峡』の詩

全文254字の長詩です。詩の前半は、内山峡の険しさ、雄大さにみせられ、その頂上に登りつめた時の素晴らしさが表現されています。

後半には、一転悟りの境地が追求され、“一心に精進して神仙の世界を求めている人、反対に名利のために動いている俗人、どちらに偏っても駄目だ。その中間に人間としての本当の生き方があるのだ。”と、美しい調べに乗せて、主張しています。

こうした考えが、後に栄一が唱え、今の時代にも必要とされる「道徳経済合一説」につながっていきます。

※本コーナーの全編を通じて、登場する人物については、歴史上の人物としてその敬称を略します。また、年齢については、当時の通例に従い数え年の表記とします。

キラリ 熱・中・時・間

～深谷市消防団女性分団～

新海春美（しんかいはるみ） 分団長

地域とつながる、そして守る

9月10日(土)に深谷ビッグタートルで「深谷市総合防災訓練」が開催されます。その会場で、救命講習のサポートをするのが、深谷市消防団女性分団（以下「女性分団」）の皆さんです。この講習のために、13名の団員全員が、応急手当普及員資格を取得し、日々研修を積み重ねてきました。

消防団において男性分団が災害時活動を行うのに対して、女性分団は、防火・防災の広報活動が中心です。「自分たちの命を、自分たちの手で守りたい」と、市内のイベントなどに積極的に参加し、女性ならではの柔らかな対応で、応急手当など普及啓発を進めています。

女性分団の発足は平成21年4月。団員は20～50代の主婦や看護師、栄養士、介護士、公務員などさまざまです。食事会などで交流を深め、「防災意識の向上」について、熱い意見を交わしています。

消防団の活動は、家庭や職場などの協力が必須です。周囲の理解と支援により、今の活動が成り立っているそうです。

以前は、市民のかたの「女性の消防団って何をしてるの？」という反応に、驚いたこともありましたが、今では根気強く続けてきたかいがあり、「また来年も来てね」と声を掛けられ、やりがいにつながっているようです。

分団長の新海さんは、「笑顔で、細やかな気遣いと、女性の良さや視点を最大限に生かして、分団をまとめていきたい」と、明るく話されていました。

▲9月10日の「深谷市総合防災訓練」に向けた、自主研修をしています

ありがとうの手紙

優秀賞
中学生の部
県大会に行かせてくれたパートナーへ

深谷中学校3年（現高校1年） 石森茂起（いしもりともき） さん

県大会に行かせてくれてありがとう。僕（ぼく）が精神面で弱くなった時に助けてくれてありがとう。トーナメントで外シード相手にやる時、最後に僕のサーブで決まったのは、このサーブを出すか悩んでいた時に言ってくれた言葉に勇気づけられたからでした。「サーブを打たれてもブロックしてあげるから。それにそれがとられても俺がたくさんスマッシュを打ってあげるから。」

その言葉が勝利につながったと思います。ありがとう。

夫婦道のススメ

手を取って一緒に

笠原（かさはら） 春次（はるじ）さん（70歳）
英子（えいこ）さん（64歳）

黒田にお住まいの笠原さんご夫妻は、結婚43年目。春次さんは、黒豚の生産を受け継ぐ家に生まれ、27歳で独立。加工・販売のお店を始め、そこへ手伝いに来たのが英子さんでした。ゼロからの出発でしたが、失うものは何もないと夫婦2人で協力し、仕事を続けてこられたそうです。

夫婦円満の秘訣（ひけつ）は、「お互いの人格を尊重すること」と「欲をかかず空気のような存在でいること」だそうです。